

## 紹介

澤井義次著

# 『ルードルフ・オットー―宗教学の原点―』

慶應義塾大学出版会 令和元年十二月 四六判 三二二頁 本体三五〇〇円



ドイツのプロテスタント組織神学者ルードルフ・オットーは、一九一七年に出版された『聖なるもの』に於いて、崇拜対象によって引き起こされる固有の宗教感情を「ヌミノーズ」という概念の下に分析した。同書は、その後、日本語を含む七か国語に翻訳された事実からも明らかのように、宗教経験の本質を鋭く洞察した著述と評価され、今日に於いても、宗教学の古典的名著と見なされている。本書は、かかるオットーが用いた「聖」「ヌミノーズ」あるいは「絶対他者」といった宗教概念を切り口として、オットーの宗教思想全体を明らかにするべく、彼のライフヒストリーを詳述することは勿論のこと、生涯に互る膨大な著述・論文、そして講演等の学術活動や東洋の宗教探求の為のフィールドワーク等を網羅し、彼の宗教思想の背景となる当代欧州の神学・哲学研究の動向をしっかりと視野に入れて分析したものである。

ちなみに、「宗教学は、キリスト教神学と密接不可分な

関わりをもちながらも、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて、キリスト教神学から次第に分離・独立していった学問分野である」。それはまさに、オットーが学問的活動を展開した時期とも重なり、自らを「ルター派神学者」であると認識していたオットーが何故、後半生に於いて、インド宗教の分析に傾斜したのか、という問題とも直結する。つまり、同時代に活躍したゼーデルブロム、ハルナック、トレルチ等の神学者による学問的な刺激を受けて、「異文化における宗教を学ぶことと、自らのキリスト教の教えをいっそう深く理解」できるとオットーは構想したのであり、その経緯が本書に詳らかにされている。オットーは、インド宗教の研究にあたり、キリスト教の伝統に根差した「絶対他者」という概念を重視した。しかしその結果、インド宗教における多神教的な特徴を見逃すことにもなった。本書は、宗教の比較研究の難しさと奥の深さを教えてくれる。

國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集

## 『近代の神道と社会』

弘文堂 令和二年二月 A5判 七七六頁 本体九〇〇円



近代に現出した神社の国家管理体制、所謂「国家神道」に関する書物は汗牛充棟の感がある。しかしその中には、執筆者の「国家神道」概念が先行し、神社、皇室祭祀、神道思想等、様々な領域を横断的に俯瞰し、自らの国家神道理解を補強するのに都合のよい史資料だけを活用する演繹的な方法を採用しているもの（とりわけ一般読者を対象とする新書版）も見受けられる。本書は、かかる書物とは全く対照的に位置づけられる研究書であり、その目途とするところは、「維新変革の理念である「諸事神武創業の始に原」づく祭政一致の思想をめぐる様々な見解とそれを制度化しようとする志向を根幹として展開した近代の神道を対象として、制度的側面はもとより、その担い手となった組織・人物・思想等の多種多様な観点から、「近代の神道と社会」を多角的に検討すること」なのである。従って、本書は、一研究者の态意的な学的操作に基づく簡潔・明解な国家神道理解を授けてくれる

ものではない。そうではなくて、三十一人の研究者がそれぞれの問題関心に則して、「近代の神道と社会」に関する様々な領域を、厳密な史料批判に基づき、堅実且つ着実に研究・考察した所産に他ならない。その結果として、本書に掲載された各論考を通じて、「祭政一致の理念を根幹とする近代の神道に関わる様々な組織・人物・思想の時代毎の背景や相違、もしくは同時代においても様々な認識の対立や葛藤があつた事実を確認」できるものであり、その一方、「近代の神道と社会」に通底する「太い連続性」をも見出せるのではなからうか。従って、本書を通じて「近代の神道と社会」の実態というものが明らかにされているのである。

なお蛇足ながら、本書は、國學院大學研究開発推進センターの研究事業「近代の神道及び神職・国学者に関する研究」を基盤として、学内外の研究者が寄稿し、一書に纏めたものである。

藤本頼生著  
〈錦正社叢書〉

## 『明治維新と天皇・神社——一五〇年前の天皇と神社政策——』

錦正社 令和二年二月 四六判 一二三頁 本体九〇〇円



「はじめに」で著者は「神道史の視点から明治維新の時期に行われた種々の諸改革が天皇・神社とどのように関わるものであったのかということ」を平易に解説したものであることを述べている。『神社新報』に平成三十年の一月から十一月の期間に十四回連載された「明治五十年 顧みる明治の御代——あの日あの時」をもとに、写真と図表も加え大幅に加筆・修正し成立したものである。本書は、「維新への胎動——大政奉還から王政復古の号令へ」、「大坂遷都の建白と大久保利通」、「京都に「学校掛」を設置」、「神祇官再興の布告」、「五箇条の御誓文」、「神仏判然令」、「国事殉難者の霊を京都霊山に祭祀」、「東京奠都の議と江戸改称の詔」、「明治の即位式」、「明治」への改元、「明治天皇の御東行」、「氷川神社親祭の詔」の章から構成されている。明治時代の制度の創設や改革を学問的水準を落とさずに、平易に学習できるように工夫されており、特に「神祇官再興の布告」の章

では複雑な明治初年の官制の変遷を理解しやすいように図解が多用されている。また、「祭政一致の詔」と称されることも多い「氷川神社親祭の詔」の章では、この詔の趣旨と経緯が理解しやすく記述されている。明治初年の政策が近代日本のみならず現代にもつながる政治行政体制の基礎と看做している著者は、本文の文末で明治期の神祇及び政教の基本に関し、「現代を生きる我々がこれを体しつつ、現代社会の諸制度のなかで、いかに顕現することができるのだろうか」と結び、課題を呈している。巻末には参考資料として「関係布告等の法令（抄）」と関連年表も収載されている。本書は、近代神道と明治維新に関する必須事項がコンパクトに纏められており、神道の視点と関連事項から明治維新の改革を勉強したい人や、神道学専攻の学生に特におすすめである。

由谷裕哉編

紹介

## 『神社合祀 再考』

岩田書院 令和二年七月 A5判 一九〇頁 本体二八〇〇円

本書は、日露戦後の神社合祀（神社整理）と呼ばれる神社の統廃合、それに先立つ地方の小祠整理について、地域社会に焦点を置き、価値中立的な立場から考察した論集である。併せて、個々の事例分析を通して、これまでの通念を相対化し、できれば代案を提示しようという意欲に溢れた論集でもある。このような意図に基づいて、本書には緒論のほか、地域社会を焦点とした五編の論考より構成されている。緒論「神社合祀研究と地域社会」（由谷裕哉）では、神社合祀・神社整理といった術語の説明、神社合祀（神社整理）の元になった明治三十九年の二つの勅令について説明がなされたあと、これまでの研究史における「偏り」が指摘される。それは、府県における神社合祀・整理をはじめとする「神社行政を一種の悪政と捉え、それに批判的な立場からの立論も少なくなかった」というものである。本書が敢えて「価値中立的な立場からの考察」を標榜している理由がここにある。

以下、収録された五編の論考は、柏木亨介「明治初期におけるムラ氏神の成立過程―熊本県阿蘇郡の神社整理―」、及川高「神社整理と奄美のシマ・村社―明治期の鳥嶼町村制と村の神社―」、時枝務「神社合祀の記念碑―群馬県高崎市大住神社の事例―」、畔上直樹「神社合祀記念事業の地域的形成についての一視角―上越市大和神社の事例をてがかりに―」、由谷裕哉「茨城県大洗町磯浜における神社の統廃合―神社合祀のロマン主義的解釈に対する代案として―」であるが、これらの論考では、従来の研究史で注目されてきた三重・和歌山両県が取り上げられていない。本書の考察は、そうした「激甚県」こそが、むしろ特異な例だったことが示唆されることにもなっていた点に興味深い。従来の研究史では注目されてこなかった事例を選び、地域社会の観点から、価値中立的に考察した本書は、神社合祀（神社整理）研究に一石を投ずるものであろう。



東郷茂彦著

紹介

## 『「天皇」 永続の研究―近現代における国体観と皇室論―』

弘文堂 令和二年七月 A5判 三六八頁 本体五二〇〇円



本書は、著者の博士学位申請論文をもとに大幅な加筆修正が施され新たに書き下ろしを加えられ一冊として纏められた経緯を持つ。著者は現在國學院大學研究開発推進機構共同研究員であり、天皇、皇室制度とその歴史について、近年意欲的に研究を継続している。序章の皇室に関する著者の基礎的考究と、本論の二部構成となっている。第一章は、古代より近現代に至る大祓詞と大祓式の通史的考察がなされ、「二部制大祓式」という著者独自の枠組みも提示される。第二章の足立正聲、第三章の山口鋭之助では人物のみならず多数の史資料を駆使した山陵についての実証的考察がなされている。足立、山口、第五章の田中治吾平、第六章の天野辰夫らの人物研究は、著者の関係当事者への取材により多大な成果が上がっている。第四章「血統永続装置としての皇室制度」は、具体的な制度と関連人物の営みの歴史に焦点が当てられ、「六節 皇位継承原則の変更企図」では現代の時事的問

題が論述される。第七章では、神道界に多大な影響があった葦津珍彦に関して、彼の著作をもとに考察が展開される。第八章では昭和二十一年の元旦詔書を組上にあげ、天皇が自らの神性を否定したものととして読むべきでないとの主張が展開される。終章では、時事的な書き下ろし「即位式と大嘗祭」が収載されている。「天皇」永続の研究」が本書の題名であるが、皇統が連続と繋がっているのと並立的に天皇制度は古代から未来へ一貫して繋がっているというモチーフが本書を貫いている。それを、著者は「古（いにしえ）より未来へのしなやかな糸」（三三五～六頁）と表現する。この皇室制度の一貫性は、我が国の独自性、国体論の一貫性ともリンクするものであるということが言えよう。本書は今後皇室について考察し、また言及する場合に参照すべき本である。皇室の弥栄を願いつつ、その行く末を憂慮している有志諸兄に本書をお勧めする。

## 紹介

伊藤哲夫著

# 『五箇条の御誓文の真実』

致知出版社 令和二年五月 四六判 二〇三頁 本体一五〇〇円

本書は、慶応四年（明治元年）三月十四日に発せられた「五箇条の御誓文」こそは、現在の我が国及び国際社会に於いても求められている根本の精神（国家の理想）であるとの著者の信念に従って執筆された。さしあたり、「御誓文」の思想的な原由を明らかにするべく、越前藩士由利公正の五箇条の原案（「議事之体大意」）に着目し、それが横井小楠の「儒教的開明思想」に淵源するものであることを指摘する。由利の原案は、「後土佐藩の福岡孝弟によって修正され、「万機公論に決すべし」との有名な文言が明確になった。かかる御誓文の確立過程を明確にする一方、著者は、御誓文発布に併せて同日に発せられた明治天皇の「御宸翰」にも着目する。それが、明治維新にあたり、国民の先頭に立たれる明治天皇のお覚悟を国民に伝えるメッセージであったと喝破する。

後半は、「五箇条の御誓文」が近代国家形成にあたり、どのような役割を果たしたのか、という問題を詳述する。

例えば、「御誓文」の「上下心を一にして、盛んに経綸を行うべし」との思想に基づき、「版籍奉還」「廃藩置県」がなされ、全国統一の中央集権国家が実現されたのである。また「智識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし」との思想は、さしあたり、岩倉具視を大使とする遣欧使節団を派遣せしめ、かかる欧米文明、就中議會政治や立憲制に対する視察を端緒として、それが後年、「国会開設の勅諭」の渙発から帝国憲法制定へと結実したのである。なお、昭和二十一年年頭に渙発された「新日本建設に関する詔書」に於いて、昭和天皇は、「御誓文」を詔書に入れることが一番の目的であったと述懐しておられる。かかる事実をして著者は、昭和天皇の大御心を、「御誓文」に民主主義の精神が内包されていることを念頭におきながら、「自国への誇りをもつことが明日の日本への真の力になる、とお考えになられた」と推察している。



岡野弘彦著 〈ちくま学芸文庫〉

## 『折口信夫伝―その思想と学問―』

筑摩書房 令和二年二月 文庫判 五〇八頁 本体一六〇〇円



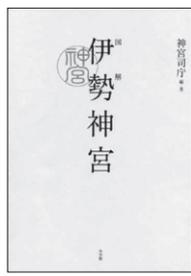
著者の岡野弘彦氏は歌人で、國學院大學名誉教授。折口の晩年の弟子にあたり、師匠に関する著作を複数著している。初版は『中央公論』に連載されたものを纏めたものとして平成十二年に出版され、第十四回和辻哲郎文化賞を受賞している。本書は、その文庫化である。

岡野氏は折口の歌人・釈道空としての側面を継承しているが、著者の折口関連の著作の中で最も本格的な評伝であり折口学入門書としても優れている。有名なマレビト論に関しては成立以前の段階から丁寧に説き起こしている。折口は柳田國男とともに「新国学」を提唱したことで有名だが、昭和十八年に発表された「平田国学の伝統」を紹介し、折口が平田篤胤の学問に国学の新しい可能性を見出していたことを紹介している。「特に文学における代表作『死者の書』」に「死者の書』の主題」で紙幅を多く割り、詳論されている。折口は太平洋戦争時の硫黄島

の戦いで養子の春洋を失っており、戦中と戦後の苦悩は大変深かった。敗戦後、折口は神道を人類教的にする考えをもっており天子即神論を否定する考えを表明していた。「神道の宗教化（一）」「神道の宗教化（二）」の章では、天皇はあくまで神のミコトモチであり神ではないという戦後の折口の考えを紹介し、「天皇は神にあらずして、神の「みこともち」であるというのは戦前から一貫した持論だが、特にこの時期に一層明確にそのことを論述する」と述べる。この天皇ミコトモチ論については、大嘗祭に関する有名な「天皇靈」論と共存しうることの批判もありそうであるが、詳しくは本書を読んできたきたい。折口の著作をもとにしてその学問の基礎と思考について解説されており、初学者でも労を厭わなければ折口学の輪郭をつかむことが可能となっている。折口に興味はあるが、とっつきにくいと感じている方の入門書として充分要請に答える本であるといえよう。

## 『図解 伊勢神宮』

小学館 令和二年四月 A4判 一六〇頁 本体一八一八円



日本各地の神社の包括宗教法人である神社本庁。その神社本庁が「本宗」として仰ぎ戴くのが伊勢の「神宮」である。本書は、その神宮について、神宮司庁広報室の神職たちが執筆・編集した初めてのいわゆる公式本であり、写真、イラスト、図を頻繁に使ったカラー図解の大形本である。目次に目をやると「第一章 神宮の自然」、「第二章 神宮の歴史」、「第三章 神宮のお祭り」、「第四章 神宮と神都」、「第五章 神宮の文化と伝統」、「第六章 神宮の基礎知識」から構成されている。神宮成立の歴史の経緯、皇室との深いかわり、二十年に一度の式年遷宮、神宮の由緒あるお祭りである神嘗祭、神宮百二十五社のマップ、神宮を崇敬した武将、江戸時代に遠国奉行の一つとしておかれた山田奉行、伊勢の御師、御蔭参りとええじゃないか、明治の激動における神宮、戦後に成立した宗教法人としての神宮と神社本庁との関り等の事項が網羅されており、各々の項目において教養としての

必要事項がコンパクトにまとめられている。「神宮を崇敬した武将」には源頼朝、源義経、足利義満、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などの著名な武将が挙げられており、戦国時代に長く中絶していた式年遷宮の復興に織田信長が多大な貢献をしたエピソードも記述されている。一般的な神宮の案内書とは一線を画し内容がしっかりしている上に、一般的なよくある疑問への答えも「Q&A」として頁が割かれており親切である。神宮に関連した施設のみではなく、神域の山・川などの自然、生息する動物の写真なども掲載されており、楽しく読み進めることができる。また、巻末には神宮の略年表と神宮と神道に関連する基礎用語の解説も掲載されており、前提的な基礎知識を持っていなくてもこれ一冊で一通り神宮の基本についておさえることが可能である。これから神宮に参拝しようとする方や神道に興味を抱き入門書を探している方には、特におすすめる本である。

伊藤聡著

紹介

## 『神道の中世―伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀―』

中央公論新社 令和二年三月 四六判 三〇四頁 本体一五〇〇円



著者の伊藤聡氏は、日本思想史専攻の学究であり、現在茨城大学人文学部教授である。「序章」で述べられているように、本書は中世神道を俯瞰しようとするものであり、専門書というより概説書に分類される本である。そもそも中世の神道書は多くが仮託書という形式をとり、本当は誰の述作によるものなのか明らかでないものが多い。この時代、神仏との習合思想や密教、禅思想、さらに道教を参考に神道書が量産された。一方で、神道の「道」という言葉が信仰を指すようになるのは中世からであり、また仏教から独立した神道流派は中世の吉田神道に濫觴がある。その意義は大きく、吉田神道の登場こそが「神道」を根本から変えてしまったことが強調されている。本地垂迹説とは、本体である仏が神に化身し衆生を救済するために顕れるという思想である。吉田兼倶は、神こそが本体で仏こそ化身に過ぎないとし、仏教からの思想的独立を宣言したと考えられる。その「吉田神

道」は近世以降、儒家神道や国学者から激しく攻撃を受け、近代には宗教としての命脈が絶たれてしまった。しかし、著者によれば儒者や神道家が形作った儒家神道は仏教的要素の部分的引きはがしが行われた吉田神道を引き継いでいるものであることが指摘されている。信仰上の神道が成立する萌芽は中世にあり、また神仏習合的要素を排除した現在の神道が成立するのは明治維新後の神仏判然令以後である。それゆえ、著者は神道が太古から連綿と継続してきたという信仰的な観念に実態は見いだせないという基本的立場に立つ。多様であり重層的である中世神道の研究と説明は著者が述べるように発展途上であり、本書は最新の研究成果を踏まえその現状を開示したものである。概説書ではあるが、中世神道のテキストを基本史料とする性質上難解な記述も多く、また非常に得るところも多い。中世神道を考える人にとっては、必読のテキストである。

## 紹介

山下久夫・斎藤英喜編

# 『日本書紀一三〇〇年史を問う』

思文閣出版 令和二年六月 A5判 四七二頁 本体八五〇〇円

『日本書紀』は、養老四年(七二〇)に撰上され、令和二年で撰上一三〇〇年を迎える。成立翌年から平安時代前期にかけていわゆる「日本紀講筈」が行われ、その記録が残されてきた。千三百年の受容史を古代・中世・近世・近現代に分けて、国文学、歴史学、神話学、思想史学など幅広い領域の研究者が、各々の切り口で分担執筆したのが本書である。「序」では、「なぜ『日本書紀一三〇〇年史』を問うのか。それは「日本」や「日本史」をめぐる諸言説を捉え直すとともに、プロパーや時代区分に閉鎖されがちな現在の学問のあり方そのものを問い直す意義をもつからだ。こうした方法的視点からの『日本書紀』の一三〇〇年の歴史を問う論文集も、本書が最初とあってよい」と本書の意義について述べている。また、『日本書紀』の受容史を描き出すことを通して、当時の思想や時代背景が明確になるといふ副次的成果もある。一三〇〇年読み継がれてきた『日本書紀』の解釈は時代により多

様で、特に中世の『日本書紀』解釈は荒唐無稽とされ、家永三郎によって「神道教義に立脚した空理空論」であるとして無視されてきた経緯がある。本書はそのような中世の解釈にも新たな光をあて、位置づけの変更を試みる。「第十六章 読み替えられた『日本書紀』の系譜と折口信夫(斎藤英喜)」で、斎藤は「折口の学問の根幹に、彼の『日本書紀』の研究、解釈があった」とし、「折口の学問もまた『日本書紀』に対する研究、解釈を通して、読み替えられた「神話」創造ではなかったか」と問題提起をしている。そして、折口の『日本書紀』の解釈を「恣意的」とする見方に対して、あくまで近代の学問の制度性の前提に立ったものであるとして、新たに「『日本書紀』の「読み」の系譜」として位置づけし直すべきであると提言する。本書は専門的であり一般読者には難解であるが、各々の興味のある分野の論文に挑戦すれば、新たな学問的段階の地平が開かれることも期待できる力作である。



清水潔 監修・著

## 『神武天皇論』

紹介

橿原神宮庁(発行)・国書刊行会(発売) 令和二年四月 A5判 四一二頁 本体三四〇〇円



本書は、神武天皇をご祭神とする橿原神宮の御鎮座百三十年を記念して、橿原神宮と主として皇學館大学の研究者等との協力により成立・出版された。「序」は橿原神宮宮司の久保田昌孝氏が執筆している。近年、新たな研究成果があり古代史の見直しの先鞭をつけたところから、古学を初めとして、古代から現代に至るまで神武天皇に関する史料を再検討し、各時代の「神武天皇」像を丹念に辿っている。序論では、監修者でもある清水氏が担当し基本史料である記紀を通じて、神武天皇の実在をめぐり問題点を再考する。第一章では、考古学の知見から神武天皇の在世を弥生時代の中期末から後期初頭頃とし、橿原神宮の宮域内に本来の橿原宮が埋没している可能性を指摘する。神武天皇研究の新たな枠組みを提示する試みと言えよう。第三章の平安から中世では神武天皇に対する特別な意識を読み取れないとしながら、一方で日蓮や吉田兼俱などの特殊な神武信仰も出現し、近世への準

備段階の意義があるとしている。第四章の近世では、後陽成天皇による「慶長勅版」の出現で、『日本書紀』が広い層に読まれるようになり神武天皇信仰が広がっていったことが一番大きなことと捉えられている。それはやがて、尊皇思想と修陵へと繋がっていくものであることが指摘されている。第五章の幕末・明治期では、「神武創業」への回帰の理念に基づく制度改革、明治天皇の神武天皇陵参拝と紀元節制定について触れられる。神武天皇陵の修陵から橿原宮の所在地特定と橿原神宮の創建への経緯も詳論されている。第六章では、近代の歴史教科書でどのような神武天皇像が教授されたのか、第七章では、神道指令と紀元節が廃止されて「建国記念の日」が制定されるまでの紆余曲折をたどる。特に近代の制度や暦との関係で神武天皇がどのように扱われたかの研究は精密であり、新たな神武天皇像の提示は新鮮である。

紹介

坂野潤治著 〈ちくま新書〉

『明治憲法史』

筑摩書房 令和二年九月 新書判 一三六頁 本体八二〇円

明治二十二年（一八八九）に發布され、敗戦に至るまで国家の基本法であった「大日本帝国憲法」（明治憲法）には、時に相反する評価がなされることがある。一つは、天皇大権が強く、議会権限が弱いという特質が、無謀な戦争の回避を困難にしたというもの。もう一つは、明治憲法下において、戦後にも劣らぬデモクラシーが開花したというもの。それでは明治憲法は、いまどのように評価すべきか。本書は、政治史研究の立場から、明治憲法の成立史にも注意を払いつつ、施行されてからの明治・大正・昭和戦前期を、「憲法史」として再構成しようとしたものである。政治史の立場からの論述であるため、憲法の条文とその註釈だけではなく、憲法によってそれぞれの権限を分与された諸機関の相互関係の分析が重視されている。著者は、これが「政治史的な明治憲法史」として重要であり、憲法施行後の政治上の大きな事件のひとつだが、明治憲法と密接に関わっていることを

踏まえて、「政治史を理解するために明治憲法の構造と機能を知る必要がある」と指摘している。こうした観点から見たとき、「本書で明らかにした『明治憲法の時代』は、ほとんどそのまま『戦後憲法の時代』に引き継がれており、時には『明治憲法の時代』の方が優れていたと感じることさえある。八年強の『総力戦の時代』を明治憲法に背負わせてしまえば、戦争責任は放棄できるが、同時に誇るべき日本近代の歴史も失ってしまう。それよりは、『明治憲法の時代』と『総力戦の時代』と『戦後憲法の時代』の三つの時代に分けた方がいのように思う。そうすれば、誤って総力戦の時代に戻らないかぎり、戦後デモクラシーから脱却すれば戦前デモクラシーに戻る。「平和と民主主義」の時代は、戦後だけでなく戦前にも存在していたのである」という著者の指摘は、憲法改正論議が喧しい今日にあって、憲法・平和・民主主義を、もう一度考え直すすべとならう。



中澤伸弘著

## 『令和の皇位継承―諸問題と課題―』

紹介

展転社 令和二年九月 B6判 二七二頁 本体一八〇〇円



本書で著者は平成から令和への皇位継承に祝意を示しつつ譲位と即位に関連する事項を詳説、皇位継承における諸儀式を詳しく解説し、また男系維持という立場から今後の課題について詳論している。同書は、大東塾の機関紙「不二」での連載記事をもととし、著者が大幅に手を加えて一冊としてまとめられた経緯を持つ。

「はじめに」で著者は、「過激派が暴挙を繰り返した」平成の御代替わりと比較して令和の御代替わりは「実に穏やか」であったと記しつつ、反対派はなお健在であり、「保守とされる方が女系論者であつたり」と明確な区分がでない難しい時代になったと認識を示している。つまり、神道を研究する立場の人々も一枚岩ではなく、将来の皇室という「家」存続の観点から男系維持という基本線をやめ女系導入もやむを得ないという勢力も出現し、事態がより複雑になってきたことを示している。「第一章 男系維持のために」の「近い遠いではなく「正統」

では、宮家の復活についてあまり範囲を広げると皇位の尊厳が揺らぐと注意を促しつつも、「皇統の理解は近い遠いで優劣を決めるのではなく、「正統である」との認識」「その御資質」が大切であらうと思います」と基本的な立場を述べている。百二十六代に及ぶ男系継承の重要性に鑑み、「女系」の実現は将来的に取り返しのできない事態、皇位の篡奪につながると警鐘をならす。トピックは改元と元号に関する問題、天皇一世一代の最重要のお祭りである大嘗祭について、また付編として皇室と靖國問題にも広く対象は及んでいる。著者は近年の研究成果を踏まえた上で皇統維持の立場からの極めてオーソドックスな提言をしていると考えられ、本書はいわば研究に基づいた理念と時事的な課題や問題をリンクさせ解決の端緒を見出そうという試みの成果であると考えられる。およそ皇室の行く末を考え深く憂慮する諸兄は、一度は参照すべき本である。